



日口関係に見る両国の国民アイデンティティ

著者	Bukh Alexander
発行年	2011
その他のタイトル	National Identities and Bilateral Relations of Japan and Russia
URL	http://hdl.handle.net/2241/114990

機関番号：12102

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2009～2010

課題番号：21810003

研究課題名（和文） 日ロ関係に見る両国の国民アイデンティティ

研究課題名（英文） National Identities and Bilateral Relations of Japan and Russia

研究代表者

Bukh Alexander (BUKH ALEXANDER)

筑波大学・大学院人文社会科学部研究科・准教授

研究者番号：70522001

研究成果の概要（和文）：

本研究はナショナル・アイデンティティの観点から、20世紀初頭から現在に至るまで、日ロ・日ソ関係の分析を行った。ここでは、アイデンティティを「自己」という自らの社会や国家に関する共通認識を「他者」との関係において形成した流動的且つ複合的な言説として捉えた。このような分析枠組みを適用し、公的文書と並んで、文学作品、学術論文、新聞記事、などという一次資料の分析を通して、両国関係における「自己」と「他者」という構造の一部を明らかにした。日本のナショナル・アイデンティティにおいては、主に戦後期に着眼し、冷戦及び国内の保守勢力と革新勢力の闘争を背景にソ連・ロシア論の展開を分析した。更に、北方領土問題という文脈において、アイヌ民族権利回運動のイデオロギーと日本におけるロシア論との関連を分析した。ロシア・ソ連のナショナル・アイデンティティの分析に当って革命直後の時期に焦点を絞り、ボリス・ピルニャクという作家の日本及び中国の印象記を分析した。その背景としてロシアの革命前の東洋と日本の認識及び革命後の民族、人種、階級、資本主義と社会主義という主な言説の展開を描き、この文脈におけるピルニャクの日本及び中国の認識の類似性及び相違性を分析した。

研究成果の概要（英文）：

This research project's main purpose was to contribute to the body of academic literature dealing with 20th century Japan's relations with the Soviet Union/Russia by examining it from the perspective of national identity. The analytical framework deployed in this project defined national identity as a social construction of the national "self" which is defined vis-à-vis an array of external "others". This project examined a wide array of official documents, literary and academic works, as well as articles in journals and newspapers in both countries that in one way or another relate to bilateral relations. By applying the "self/other" framework this project analyzed the role of Japan and Russia in the construction of each other's identity in the 20th century. In the case of Japan, this project focused mainly on the post-WWII era. It analyzed the dominant perceptions of the Soviet Union and Russia against the background of the Cold War and the domestic rivalry between the conservatives and the progressives. In the context of the Northern Territories territorial dispute, this project paid special attention to the ideology of the Ainu movement, the challenge it posed to the dominant discourse on the Northern Territories and its discursive relationship with the contemporary debates on Russia in Japan. In the case of Russia, this project focused on the years in the immediate aftermath of the Russian revolution. It examined the dominant identity discourses that evolved around the notions of nation, race, class, capitalism and socialism and examined the Russian perceptions of Japan and China in relation to these discursive formations. Unlike other works on Pil'niak's travelogues from Japan, this research traces his impressions not to the Orientalistic difference between the two but to the similarity between Pil'niak vision on Russian national identity and Japan. Furthermore, this part of the project shows that, taken individually, hardly any of Pil'niak's ideas can be considered original if compared to the debates about the Far East in general and Japan in particular in pre-Revolutionary Russia. The uniqueness of Pil'niak's narrative, however, lies in the narrative taken as a whole. Namely, it is unique in its flexibility of moving from one taxonomy to another, from Marxist

categories to racialist dichotomies of East and West.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	920,000	276,000	1,196,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,920,000	576,000	2,496,000

研究分野：日ロ関係

科研費の分科・細目：地域研究・地域研究

キーワード：日ロ関係、国際関係、ナショナル・アイデンティティ、自己と他者

1. 研究開始当初の背景

明治以降、ロシアと日本は、思想、文学、美術、技術、という様々な次元において相互的に強い影響を与えながら、複数の武力衝突を経験し、今日においても領土問題のために両国関係は完全に正常化していない。と同時に、近代化開始以降、西洋を主な「他者」にしなから「西洋・東洋」という構造に必ずしも該当しないナショナル・アイデンティティを構築してきたという類似点を有している。このように日ロ関係における「自己・他者」構造は特殊であり、両国関係の研究においてのみならず、近代国家の国民アイデンティティの形成という視点から、または国際関係論の視点から非常に興味深い事例である。

尚、国内外の日ロ関係に関する研究は多くの成果を上げてきたが、この研究は個別的事件や時期に焦点を絞る、または外交史的な特色が強いのである。従って、国民アイデンティティの視座から両国における相手国の認識に関する通史的な研究は乏しいである。他方、日本研究において、「アジア」及び「西洋」との関係における日本の自己認識の成立、ロシア研究では、ロシア・ソ連の欧米認識、国内の少数民族認識、またはソ連崩壊後の新生ロシアのアイデンティティの構築というテーマは研究されてきたが、両国の相互認識に関する研究は乏しいのであった。

2. 研究の目的

本研究の主たる目的は国民アイデンティティの観点から、20世紀初頭から現在に至るまで、日ロ・日ソ関係の分析であった。こうした研究を通じて、両国間の国際関係、ならびに両国の対外政策に新しい視座から光を当てることをめざした。本研究は二つの段階に分かれていた。第一段階の主たる目的は、「自己・他者」という分析枠組みを適用し、日露戦争の前後（主に戦後期に着目）から現在に至るまで、日本のナショナル・アイデンティティにおけるロシアの位置づけを明らかにすることであった。本研究を遂行する際に、1970年代以降のアイヌの民族権利回復運動と日本におけるロシア認識との関連性を分析した。第二段階においては、革命後のロシアにおけるナショナル・アイデンティティの変容に焦点を絞り、日本及び中国認識との関連を検討した。

3. 研究の方法

言説分析という方法を用い、国際関係論における「自己・他者」という分析枠組みを適用した。日本のナショナル・アイデンティティにおけるソ連・ロシアの位置づけを分析した際に、公式的な文書、主な政党の刊行物、新聞及び雑誌、文学作品、学術論文のようなテキストを収集し、そこにおけるロシア・ソ連の認識及当時の主流言説との関連性を分析した。革命後のロシアのナショナル・アイデンティティにおける日本の位置づけを分析するに当たって、まずその背景を構築した。そ

のために、1) 革命前の日本及び中国の認識(旅行記、新聞や雑誌、学術論文等を通して)、2) 革命によるロシアのナショナリズムに対する影響を分析した。このような背景を元に、1925年に日本及び中国を訪れたボリス・ピリニャクというソ連の作家の旅行記を分析し、革命後のロシアと日本及び中国の認識を分析した。

4. 研究成果

1) この研究の成果として戦後日本のナショナル・アイデンティティにおけるソ連・ロシアの位置づけを明らかにした。既存の研究は、日本のソ連・ロシア認識を日露戦争、太平洋戦争の時のソ連の介入、北方領土問題及びシベリア抑留という歴史的な体験に由来していると主張している。本研究は、両国関係における歴史的な経験の重要性を否定しないが、戦後における冷戦及び国内の保守勢力と革新勢力の闘争、又は1970年代に台頭している日本人論という背景の重要性を指摘し、政治的な言説におけるソ連と共産主義の認識及び文化論的な言説におけるロシア論の役割を分析した。このように、本研究は、戦後日本のソ連認識の変容における日本と欧米諸国との関係の重要性を指摘し、1970年代の日本人論と同時期のロシア論の普及との関係を分析した。最後に北方領土問題と日本のナショナル・アイデンティティとの関連において、日本の特殊性という言説における北方領土問題の位置づけ、及びこのような言説と齟齬しているアイヌ権利回復運動のイデオロギーとの関連性を分析した。

2) 革命後のロシアのナショナル・アイデンティティと日本認識の関連性。内外の研究においては、革命のロシアにおけるオリエンタリズム及び日本の認識に関する研究が豊富であるが、革命後のロシアのナショナリズム及び東洋と日本の認識に関する研究は乏しいである。本研究は、19世紀及び20世紀初頭のロシアにおけるナショナル・アイデンティティと東洋・日本の認識に関する専攻研究を整理し、革命後(1920年代を中心に)ロシアのナショナリズムを分析した。後者を分析するにあたって、主にナショナル・ボルシェビキの言説に着目した。このような背景を元にして、1925-26年に日本及び中国を訪問したボリス・ピリニャクというソ連の作家の両国の印象記を分析した。当時、ピリニャクはソ連を代表する著名な作家であり、氏の作品は多くの人々に読まれた。更に、ピリニャクはロシア革命を肯定的に受けているが、革命をロシアの特殊性の具現化とし

て位置付けている。つまり、ソ連では1930年代以降、革命のナショナル的な解釈が支配的になるが、氏は早い段階から、社会主義と民族主義と二つの言説を内面化している。本研究はピリニャクのロシアのナショナル・アイデンティティの理解を分析し、その視座から日本と中国の印象、そこにおける類似性及び相違性の分析を行った。既存の研究においては、ピリニャクの日本の印象記はオリエンタリズム的として一般的に捉えているが、本研究は氏のロシアの認識及び中国の印象記との比較を通じ、異なった解釈を提供している。つまり、本研究は、ピリニャクのロシア認識と日本の印象の類似性を指摘し、氏の日本の文化や慣習の記述の根源のオリエンタリズム的な相違(difference)にあるのではなく、両国の内在的な類似性(similarity)とナショナリズムにおける国民性の特殊性の絶対という矛盾にあると主張している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1 件)

- 1) Bukh, Alexander "Ainu Identity and Japan's Identity: The Struggle for Subjectivity", *Copenhagen Journal of Asia Studies* 2010 (28:2), 35-53

[学会発表] (計 3 件)

- 1) Bukh, Alexander "Early Grassroots Movement for the Return of the Northern Territories" Association of Asian Studies Conference, Honolulu March 2011
- 2) Bukh, Alexander "Revisiting Boris Pilniak's Travelogue from Japan and China" Israeli Asian Studies Conference, Haifa April 2010
- 3) Bukh, Alexander "Japan's 'Russia', Russia's 'Japan'" Association for Studies of Nationalism (ASN), New York April 2009

[図書] (計 2 件)

- 1) Bukh, Alexander *Japan's National Identity and Foreign Policy: "Russia" as Japan's "Other"*, London: Routledge, 192pp. August 2009
- 2) Bukh, Alexander "National Identity and

Race in Post-Revolutionary Russia:
Reading Pil'niak's Travelogues from Japan and
China" in Demel and Kowner eds., *Race and
Racism in Modern East Asia: Western
Constructions and Local Reactions*, Brill 2011
近刊 (分担書)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

Bukh Alexander (Bukh Alexander)
筑波大学・大学院人文社会科学研究科・准
教授
研究者番号：70522001